

研修名 保健衛生 安全対策

令和元年12月13日（金）10：45～12：15

講師 「安全から保育の質を考える」

講師 ジャーナリスト 東京都市大学 人間科学部 客員教授
一般社団法人 子ども安全計画研究所 代表理事
猪熊 弘子 氏

1 講演要旨

1) 保育でいちばん大切なことは子どもの命を守ること

「いのちを守る」とは保育の本質である養護の精神であり、①生命の保持+②情緒の安定を一体的に行うことである。①生命の保持には、1) 一人一人の子どもが、快適に生活できるようにする。2) 一人一人の子どもが、健康で安全に過ごせるようにする。3) 一人一人の子どもの生理的欲求が、十分に満たされるようにする。4) 一人一人の子どもの健康増進が、積極的に図られるようにする。これら4つの内容が挙げられ、②情緒の安定には、1) 一人一人の子どもが、安定感をもって過ごせるようにする。2) 一人一人の子どもが、自分の気持ちを安心して表すことができるようにする。3) 一人一人の子どもが、周囲から主体として受け止められ、主体として育ち、自分を肯定する気持ちが育まれていくようにする。4) 一人一人の子どもがくつろいで共に過ごし、心身の疲れが癒されるようにする。これら4つの内容が挙げられる。

上記のように、「いのちを守る」ことが大切とされているなかでも、8人もの保育者が危険個所を把握しながら放置し、本棚の隙間で子どもがなくなったという事件が発生している。この事件は、「決して不慮の事故ではなく、日常の保育に多くの問題があり、その問題を放置した故に起きた、起こるべくして起きた事故である」と書面に残されている。このような事件を起こさないためにも、園内の見取り図を貼りだし、保育者全員で危険個所をチェックするなど、「いのちを守る」にはどうすべきかを考える必要がある。

2) 「保育事故」について知っておきたいこと

保育事故を減らすには、常に「安全のアンテナ」を「全方位」に向ける必要がある。子どもの命を奪うことは、家族を苦しめることだけではなく、園の信頼をも失うこととなる。保育者は子どもの怪我になれているため、小さな危険も目を瞑りがちではあるが、ヒヤリハット（大きな事故につながる危険があるが、事故にならなかった事柄）を出し合い、職員全員が把握しておくことが子どもの命を守ることにつながる。また、保育者はいのちを守るだけではなく、

救うことも大切である。子どもが重篤な状態になるまでの時間はわずか4分しかないという。その4分の間に保育者ができることはいくつかある。救急車の要請・人工呼吸・AED・胸骨圧迫があり、救急車が到着するまでの時間で子どもの命を左右することにもなる。そのため、救急の知識も保育者が得ておく必要がある。死亡事故は子どもの年齢によっても違い、0.1.2歳児の子どもの死亡事故が多いという。中でも睡眠中の死亡事故が多く、注意する点がいくつかある。①「うつぶせ寝」を絶対に避ける②顔が見える明るい部屋で寝かせる③必ずタイマーを使って、確実に呼吸チェックをする④寝具などが顔にかからないようにする、周囲のものに気を付けるなど、死を未然に防ぐためにも気を付けなければならない。他にも、誤飲・溺水事故など事故はたくさん起きている。

事故を防ぐためにも、保育者一人一人の考え方の違いを知り、視点の異なる防護策を何重にも組み合わせることで、事故や不祥事が発生する危険性を低減させることができる。

（２）感想

今回の研修を受けて、私たち保育者は子どものいのちを預かっていることを改めて実感した。怪我に慣れてしまっている保育者は、怪我をした原因の対処を怠ることが多くある。たった一つの小さな怪我でも、その怪我の原因はなにかを考え、見逃すのではなくどうすべきか話し合う必要がある。怪我を起こすのではなく、起こさないためにはどうすべきか、日々の保育の中で危険個所はないかなどを調べ、保育者同士で話し合い、意見を出し合える環境づくりが大切だと感じた。死亡事故を起こさないためにも、私たち保育者がまず信頼関係を結び、子どもたちが安心して過ごせる環境を作ることが必要である。そして、事故が起きてしまったとき、子どもが重篤な状態になるまでのわずか4分間にできることはなにかを知り、胸骨圧迫・人工呼吸などの知識を全員が持つておくべきであると感じた。

これまでも保育事故は数多く起きており、それらの保育事故を繰り返さないためにも、一つ一つの怪我に焦点を当てていき、怪我を未然に防げるよう

「危険」を察知する目を備えておく必要がある。「いのちを守る」ためにも、人と人とのつながりを大切にし、「大丈夫」と決めつけるのではなく、「なぜ起きてしまったのか」職員全体で考え、より良い保育を作り上げていきたい。